主題

自己を取り巻く見えないルール

住居は本来、人間の身体のみならず精神の安住できる場所としてある。しかしながら、そこに侵入してくる来訪者たちによって、その安定が切り崩される。本作品が示しているのは、自己と世界、社会、他者との関係である。非合理ささえ伴って入り込んでくる他者が、自己の存在基盤を揺るがす。そのことによって、普段は意識すらしないような社会のルールや、自己を根拠づける規範の存在が明らかになる。

構成

構成 1

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～ P二二三・3〈「さあ。」〉	日曜日、自宅で過ごしていた「彼」がモリソバを食べていたところ、玄関のブザーが鳴った。ブザーはずっと前の日曜日に、見知らぬ電気屋が強引に取り付けたものだった。それを思い出した「彼」は腹を立てながら玄関の扉を開けると、顎鬚を生やした男とイガクリ坊主の男が立っていた。イガクリは大きな写真機を持っている。「彼」は二人を知らない。顎鬚は「彼」の家の写真を撮ると言い、名刺を「彼」に握らせる。
第二段	P二二三・4〈二人の男は一斉に腰をかがめて、〉～ P二二五・8〈「ではお答えします。外郭団体ではありません！」〉	見知らぬ二人の男が「彼」の自宅に入ってきた。顎鬚の名刺には「金融公庫住宅資料調査社写真班・多々良太郎」とある。男たちは家の中で撮影を始め、「彼」は台所に追いやられてしまう。顎鬚は、自分たちには家を撮影する責任があり、家には撮影される義務があると言う。「彼」が家に義務があるなら家の持ち主にも義務があると言い返すと、顎鬚は「彼」が撮影される義務はないと言う。家は住宅金融公庫から融資を受けていたので、「彼」は男たちの勤め先がその外郭団体か何かなのか、と尋ねると、そうではないと言う。
第三段	P二二五・9〈あまりにもピタリとした答え方だったので、〉～ P二二八・8〈いまいましさを感じた。〉	撮影を続ける男たちを前に、「彼」は電気屋のことを思い出す。電気屋は突然来訪し、家の構造が悪いから玄関にベルかブザーを付けろと言ってきた。そうでなければ来訪者が迷惑すると言う電気屋に対し、「彼」はブザーだと音色が一つで来訪者の正体が分からないことが嫌だと言う。電気屋は、それでは来訪者を疲労させるだけであり、「彼」の身勝手だと抗弁する。そのまま押し切られ、ブザーの取り付けに至ったのだった。その状況が今の状況と酷似していることに気づき、「彼」はいまいましさを感じた。
第四段	P二二八・9〈つまりおれがまごまごと押し戻されてしまうのは――〉～ 終わり	半年前に家を建てたとき、その費用の六分の五を融資や借金でまかなったことを振り返り、「彼」は自分が家の付属物であるような気がしているのだった。撮影を続ける男たちの横で再びモリソバを食べようとすると、イガクリにそれをどけろと言われる。「彼」はモリソバを持って家の端の部屋に移動する。釈然としない気持ちでいると、二人がその部屋にまでやって来て、「彼」を無視して家の庭を品評し始めた。「彼」は何か叫び出そうとしたが、ソバが口に詰まっていて声が出ない。

構成2

◆写真班の論理

写真班――撮る責任
家――撮られる義務
――――（断絶）――――
「彼」――撮らせる義務
　撮られる義務はない
　状況からの疎外

「彼」の不在

←根拠
「彼」＝「彼」
家 ≒「彼」の家
←
◎所有をめぐる論理

◆写真班と電気屋の共通点

・「彼」の存在を無視
・名刺で自らの立場を保証
・「彼」の引き下がり方
　引き下がる理由＝家と経済と所有の関係に対する確信のなさ

◆電気屋の論理と「彼」の論理

・ブザーと「ごめんください」（声がけ）
　電気屋――ブザー
　「聞こえなきゃ意味がない」
　　↓来訪者が損をする
　「彼」――声がけ
　「性格が見当つく」
　　↓住人のための行為

「彼」の不在

※一八〇度異なる観点
◎（電気屋）損得をめぐる論理

◆「彼」の居場所と心情の連関

玄関
・自分に対する腹立ち
・狼狽、混乱
←
台所
・言うことが見つからない
←
茶の間
・来訪者たちと自分とがいまいましい
・自分と家の関係に対する理解
←
次の間・庭（見るだけ）
・曖昧さと向き合う
・「何か」を叫ぼうとするができない

◎家の奥へと追いやられていく状況に比例して、「彼」の状況に対する理解は深まるが、問題は解決しない。